様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月２５日現在

研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８３２００３７
研究課題名（和文）　初期ネーデルラント絵画における加筆肖像に関する研究

研究課題名（英文）　A Study of Added Portraits in Early Netehrlandish Painting

研究代表者
蜷川　順子（NINAGAWA JUNKO）
関西大学・文学部・教授
研究者番号：００２６８４６８

研究成果の概要：本研究では、初期ネーデルラント絵画の領域で、完成後一定期間をおいて加筆された肖像のある絵画作品を収集し､それを様々な美術史的観点から考察した｡この領域は、中世以来初めての本格的な再現的自然主義を発達させたことで知られる。画面をもう一つの世界の一部として実現し、現実にはない理想や願望を投影するための仮想的な場が求められたものと思われる。加筆肖像は、そのような画面と観者との相互交流の痕跡として理解できる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	2,300,000	0	2,300,000
２００７年度	2,000,000	600,000	2,600,000
２００８年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
総　計	6,000,000	1,110,000	7,110,000

研究分野：西洋美術史
科研費の分科・細目：哲学・美学、美術史
キーワード：肖像画、加筆、初期ネーデルラント絵画、景観、近代、寄進者、

１．研究開始当初の背景
(1)研究開始時までに行っていた、保存・修復の思想と歴史に関する研究（「５．主な発表論文など」欄の⑤⑥を参照）の過程で、加筆は従来、絵画修復や技法研究の対象として論じられていたが、基本的には作品のオリジナリティ保存のために取り除かれるべきものとされ、これを積極的に捉え直す論考はないことに気づいた。しかしながら、加筆肖像のように意図的な試みは、それ自体で作品を新たに再生させるほどの意味をもつ場合があり、美術史や文化史の対象となりうるのではないかと考えられた。しかも、これらの領域と絵画修復や技法研究などの実技領域との結節点に位置する学際的な視野をもった研究が展開できると思われた。
(2)加筆肖像の問題は、肖像画そのものの研究よりも、絵画が観者に及ぼす力、あるいは、絵画への観者のアプローチを問題とするので、いくつかの論考を経て研究開始時までに関心の高まっていたメディア論、コミュニケーション理論や画像理論の観点からも、興味深い問題を提示できると考えられた。
(3)関西大学の学内助成研究として着手した《メロド三連画》研究（「５．主な発表論文など」欄の③を参照）の過程で、加筆をめぐる具体的な諸問題を洗い出すことができ、研究拡張とその実現の可能性を実感した。

２．研究の目的

ネーデルラント絵画は、キリスト教美術における最初の徹底した現実主義で知られると共に、写実を基本とした近代絵画の出発点に位置づけられる。同地域で先行する中世末の諸作品からも、同時代の他地域の諸作品からも区別される画面の写実性は、絵画に対する一定の要請に基づいて実現されたと考えられるが、その要請とは何よりも、画面をもう一つの世界の一部のイメージとして実現し、それによって様々な理想や願望を投影するための仮想的な場を獲得することにあったと思われる。すなわち加筆肖像は、肖像の座主（モデル）が自らの肖像を代理として、件の絵画世界に参入している状態を示そうとしたのであり、新しい座主は、既存の絵画世界を一定解釈し、それに対して何らかの―多くは積極的な―反応をし、さらに肖像を加えさせるほどの強い態度表明をしたと看做されるのである。

この仮説を、具体的な作例に即して裏付けることを目的とし、以下の諸問題を明らかにすることをめざした。

(1)いつ、どのようにして加筆が発見されたか・・絵画の受容史の諸問題。
(2)誰が加筆されたか・・加筆肖像の座主同定問題。
(3)誰が加筆を実施したか・・画家や工房の実態に関する諸問題。
(4)誰が加筆させたか・・ 新しい注文主の既存の絵画への反応に関する諸問題。
(5)いつ加筆されたか・・寄進者や注文主の個人史に関する諸問題。
(6)如何に加筆されたか・・技術的諸問題。
(7)何故加筆されたか、誰の意図であったか・・画面の総合的解釈の問題。

以上のような形で、加筆された具体的な肖像に注目することで、絵画からの発信とその受容、絵画への働きかけとその変貌、新たな発信とその受容という連関の中で、一定の時間を経た絵画の新たな成立とその意味とを、言わば四次元的に捉えることを最終的な目的とした。

３．研究の方法

対象領域において加筆例の収集を行い、科学的調査が行われている場合はそのデータを、近年の古文書学的調査が実施されている場合はそのデータを収集した。これらのデータをもとに、「２．研究の目的」で挙げた諸問題を具体的に考察した。以下に代表的な方法をあげる（番号は上記の諸問題に対応）。

■ロベール・カンパン《メロド三連画》（メトロポリタン美術館）
(1) 1957 年、所蔵地がメトロポリタン美術館に移った際の調査において、左翼の女性寄進者の肖像が加筆であることがＸ線、赤外線で確認された。
(2)座主同定に関する議論は、紋章同定法に基づき 1920 年代に始まる。シャトレによって 1996 年に再提起され、アンスタレ等による古文書調査、クラインによる年輪年代学調査結果も加わって激化した近年の諸議論を再検討および解釈した。
(3)再構成された座主の生涯、絵画様式、カンパン工房の実態調査に基づき総合的に考察を加えた。
(4)上記(2)に基づき、当時の服飾史等も合わせて検討した。
(5)上記(2)(3)に基づき、加筆された時期の可能性を絞込んだ。
(6)上記(1)に基づき、鉛白、下絵の有無を調査した。
(7)主に上記(2)(4)の結果を傍証として考察・解釈を行った。

■ヘラルト・ダフィット《キリストの洗礼三連画》（ブリュッヘ市立美術館）
(1)19 世紀のブリュッヘでウィーレが発見した様々な史料のうち、本作品寄進の条件を記した 1520 年 12 月 18 日の古文書の解釈に基づき、フリートレンダー等によって、母娘の肖像のある外翼すべてが加筆とされた。
(2)上記史料の解釈に基づく。
(3)ヘラルト・ダフィットの動向を示す史料、および加筆された肖像の様式を検討した。
(4)新出史料の分析や図像解釈に基づき、既存の絵画が新しい座主にとって意味したことを考察した。
(5)上記(4)に基づき、加筆された時期の可能性を絞り込んだ。
(6)通常の作画。何も描かれていない扉の問題を検討した。
(7)上記(4)に基づき、最初の画面の制作意図も合わせて、総合的に考察した。

上記二点に用いた方法を適宜援用しながら、以下の主題に分類される加筆肖像を考察した。

■子供の加筆肖像のある諸作品
>ロヒール・ファン・デル・ウェイデン工房《聖ヒューベルトの遺体発掘》（ナショナル・ギャラリー、ロンドン）
>ハンス・メムリンク《モレーリ三連画》（ブリュッヘ市立美術館）
・数人の子供の肖像の加筆、位置の変更。
>ハンス・メムリンク《立っている聖母子と寄進者たち》（アウロラ・アート・ファンド / ブカレスト国立美術館）
・死せる子供の肖像の加筆

>「ランスロート・ブロンデール周辺の画家」《マルガレータ・ファン・メッテネイエの肖像》（ブリュッヘ市立美術館）
・死せる子供の肖像の加筆
>アドレアーン・イーゼンブラント《神殿奉献三連画》（シント・サルヴァトール聖堂、ブリュッヘ）
・最初の寄進者の孫娘の肖像の加筆
>「南ネーデルラントの逸名の画家」《ヨース・ファン・デル・ブルヒの二連画》（ハーヴァード大学付属フォッグ美術館）
・父の肖像に置き換えられた寄進者

＊以下は、加筆如何に関する議論のある作品で、制作段階での変更と考えられるもの。
>「プラドのマギの礼拝の画家」《神殿奉献》（ナショナル・ギャラリー、ワシントン）
・二人の子供の部分的変更。
>ヒューホー・ファン・デル・フース《ポルティナーリ三連画》（ウフィーツィ美術館）
・制作段階での加筆。

＊その他
>ディルク・バウツ工房、ヒューホー・ファン・デル・フース《聖ヒッポリトの殉教三連画》（シント・サルヴァトール聖堂、ブリュッヘ）
・孫の守護聖人を描いた扉の添付

■夫婦か家族の肖像、あるいはそれを描いた扉が添付された作品
>「南ネーデルラントの逸名の画家」《二人の寄進者のいる二連画》（アントウェルペン王立美術館）
>「南ネーデルラントの逸名の画家」《三人の寄進者のいる二連画》（アントウェルペン王立美術館）
>ヒューホー・ファン・デル・フースと逸名の画家《フランクフルトの聖母子三連画》（シュテーデル美術館、フランクフルト）
>ピーテル・クック・ファン・アロストとディルク・ヤコブス《聖家族三連画》（カタリナ修道院美術館、ユトレヒト）
>「南ネーデルラントの逸名の画家」《半身の十字架降下三連画》（ルーヴェン市立美術館）
>ヘラルト・ダフィットとピーテル・プールブス《キリストの変容三連画》（シント・サルヴァトール聖堂、ブリュッヘ）

＊何も描かれていない、あるいは、黒く塗られた扉の諸問題－画中画に描かれているもの、スペインなどへの輸出品に見られるもの数点の考察。

■家族関係以外の、個人的あるいは社会的理由による加筆肖像のある作品
>ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《七秘跡三連画》（アントウェルペン王立美術館）
>ハンス・メムリンク《最後の審判》（聖母聖堂、グダニスク）
>ロヒール・ファン・デル・ウェイデン工房《ジャン・ド・フロアモンの二連画》（カン市立美術館 / ブリュッセル王立美術館）
>「聖カタリナ伝の画家」《最後の晩餐》（フロート・セミナリエ、ブリュッヘ）
＊その他
>ロヒール・ファン・デル・ウェイデン《ボーヌ祭壇画》（ボーヌ施療院美術館）
・議論はあるが、制作段階での変更と考えられる。
>史料から知られる加筆肖像のある作品を数点検討。

■聖職者の加筆肖像のある作品
>ロヒール・ファン・デル・ウェイデン工房《受胎告知三連画》（ルーヴル美術館 / トリノ市立美術館）
>「南ネーデルラントの逸名の画家」《聖誕三連画》（メイヤー・ファン・デン・ベルフ美術館、アントウェルペン）
>「1499 年の画家」《修道院長クリスティアーン・ド・ホントの二連画》（アントウェルペン王立美術館）

■別基材に描かれた肖像が添付された例―その理由に関する史料的裏付のないもの
>「コーリン・デ・コーテル周辺の画家」《聖職者の寄進者のいる聖誕と割礼》（ブリュッセル王立美術館）
>ロヒール・ファン・デル・ウェイデン工房《スフォルツァ三連画》（ブリュッセル王立美術館）
>ヨース・ファン・ヘント工房（ペドロ・ベルグーテ？）《講義を聴くフェデリコ・ダ・モンテフェルトロと彼の息子グィドバルド》（ハンプトン・コート、ロンドン）
> コーリン・デ・コーテル《ヨハンナ・ファン・メールケ三連画》（ブリュッセル王立美術館）
> コーリン・デ・コーテル《ザンクト・アルバヌス三連画》（バイエルン国立絵画館、ミュンヘン他）

■加筆肖像の逆のパターンとして、肖像が消去された例をヒエロニムス・ボスの作品にしぼって調査
>《聖女殉教の三連画》（パラッツォ・ドゥカーレ、ヴェネツィア）
>《荒野の洗礼者聖ヨハネ》（ラザロ＝ガルディアーノ美術館、マドリード）
>ヒエロニムス・ボスの模写《カナの結婚》（ボイマンス・ファン・ブーニンゲン美術館、ロッテルダム）
・オリジナル作品（素描から知られる）にあ

った寄進者が消えている。
>《エッケ・ホモ》（ワルラフ＝リヒャルツ美術館、フランクフルト）
>《最後の審判》ウィーン造形芸術アカデミー付属美術館
・下絵にのみ寄進者が見られる。

４．研究成果

いくつかの論題については、国内学会および国際学会で口頭発表を行い、学術雑誌や当該ウェブサイトに掲載した。全体的研究成果は、英文による学位請求論文として、ベルギー王立ヘント大学文学部（マクシミリアーン・マルテンス教授）に提出した。日本語版は、順次刊行予定である。

以下、主な作品や論題について、「２．研究の目的」に挙げた諸問題に即して、それぞれの考察結果を記す。

■ロベール・カンパン《メロド三連画》

(1)本三連画が、ブリュッセルのメロド伯爵家からニューヨークのメトロポリタン美術館に売却された 1957 年、公開に先立って行われた調査の過程で、左翼の女性寄進者の肖像が加筆であることが発見された。

(2)アンスタレ等の古文書調査結果に基づき、最初の寄進者肖像は、ケルンの布地商人ペーテル・エンゲルブレヒトのもので、加筆されたのは、シャトレ等が推論した第一の妻ではなく、彼の第二の妻だと考えられる。この仮説にとって最も大きな障壁は、彼女の服装にあったので、当時のファッションや描かれた服装をめぐる様々な慣例を検討し、蓋然性を高めることができた。

(3)カンパン工房の実情および画面の様式上の特徴に基づき、加筆を実施したのはロヒール・ファン・デル・ウェイデンの工房だったと考えられる。

(4)史料から知られるペーテルの当時の実情および最初の三連画制作の意図を検討した結果、肖像の加筆を注文したのは、新しい座主であった可能性が高い。

(5)女性寄進者は、下の絵具が滲みだしてこないように鉛白でシールドをした上に描かれている。その他の加筆は、通常の重ね描き。

(6)様々な要件を総合するなら、本三連画は三段階を経て成立し、加筆肖像は最終段階に行われた。第一段階では、婚姻の贈り物、第二段階では結婚後の繁栄等の祈願画としての性格をもち、第二の妻はその画面へ肖像を加筆させるなど創意工夫を行うことで、自らの存在をアピールした。

■ヘラルト・ダフィット《キリストの洗礼三連画》

(1) 19 世紀のブリュッヘで徹底した古文書調査を行ったウィーレは、ヘラルト・ダフィットをはじめとする画家の発掘や肖像の座主の特定に寄与し、本作品に関しては、寄進の条件を記した 1520 年 12 月 18 日の古文書に基づいて、描かれた人物たちをヤン・デス・トロンペスとその家族だと特定した。母娘の肖像のある外翼すべてが加筆とされるのは 20 世紀になってからのことである。

(2)加筆されたのは、幼児キリストから恩寵のブドウを受け取る姿で描かれた、寄進者の二番目の妻とその長女である。

(3)加筆を実施したのはダフィット工房であるが、画家自身はイタリアに行って留守がちだったので、彼の兄弟か工房の弟子も加筆を行った。

(4)加筆費用はヤンが支払ったが、画面の内容は妻の着想によるものであろう。

(5)第二の妻が第二子を懐妊した際に、後継者たる男子誕生を祈願して描かれた。

(6)三連画の扉全体を、内部の完成から時間をおいて描いたものだが、これは珍しい事例ではない。

(7)本研究の意義は、加筆の理由を考察する場合に最も重要となる、最初の画面の解釈にある。本作品は、病弱な身障者だったと思われる嫡男の庇護と家門継承を祈願して制作されたと思われる。この仮説は、新しい史料の発見と、従来の史料の再検討によって補強され、この解釈を元に加筆の意図等が明らかになった。

■子供の加筆肖像のある諸作品

>《聖ヒューベルトの遺体発掘》の画面に、寄進者の孫と思われる二人の子供を加えたのはロヒール工房だったと思われる。ここに見られる子供の微笑みは、西洋美術史上最も早いものの一つで、ロヒール・ファン・デル・ウェイデンが嘆きの感情ばかりでなく、笑いにこだわったことがわかり、その理由についても新知見が得られた。

>《モレーリ三連画》の寄進者夫妻とその子供たちは、19 世紀末にウィーレによって特定されたが、近年の古文書研究により再検討が加えられた。その成果に基づくなら、ここで左翼に描かれた子供たちのうち後列にいる三人は、描かれた時点で死んでいた子供であり、彼らを微笑ませている点に、積極的に子供の存在をアピールするような、他の子供の加筆の理由を探ることができる。

>メムリンクの《立っている聖母子と寄進者たち》、およびブロンデール周辺の画家による《マルガレータ・ファン・メッテネイエの肖像》に加筆された子供は、描かれた時点で死んでいた子供の肖像、あるいは死んだ子供の表象である。

>その他、孫娘が自分で加筆を注文したイーゼンブラントの《神殿奉献三連画》や、父の肖像に置き換えられた《ヨース・ファン・デ

ル・ブルヒの二連画》など、絵画作品を通した世代間の交流が認められる。また、加筆か、形成過程での変更かをめぐって議論のあるいくつかの作品を検討し、一定の結論を提示した。

■夫婦か家族の肖像、あるいはそれを描いた扉が添付された作品

›アントウェルペン王立美術館にある、《二人の寄進者のいる二連画》や《三人の寄進者のいる二連画》は共に、既存の聖母子像に寄進者の肖像を描いたパネルを添加したものである。こうした扉の添加は、美術作品の市場の発達を示すものである。また、三人の寄進者のうち若い女性の顔が変えられている。
›《フランクフルトの聖母子三連画》は、聖母子像を載せた枠組装置に寄進者像が描かれるという特殊な仕方で、肖像が加えられている。元々の聖母子像は結婚記念の贈り物と考えられるが、一定期間をおいて寄進者の肖像を加えた背景には、寄進者の昇進か、子宝祈願があったと考えられる。
›ピーテル・クック・ファン・アロストの《聖家族三連画》は、寄進者が描かれるべきところが空白のまま市場にだされた作品で、購入者が地方画家に肖像の加筆を依頼するタイプのものである。聖家族という吉祥的主題は数多く制作され、ファン・アロスト工房のものには扉を用いて肖像が加えられたものもある。
›ルーヴェンの《半身の十字架降下》に見られるような受難伝の主題も、市場向けの、いわゆるキャビネット画と呼ばれるセミ量産品に数多くみられ、夫妻像のある扉などが添加された。
›関連事項として、購入者が画像や祈りの言葉を書き込むことを見越して、扉を黒く塗ったまま市場に出されたり、スペインなどに輸出されたりした作品も制作された。

■家族関係以外の、個人的あるいは社会的理由による加筆肖像のある作品

›ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの《七秘蹟三連画》には、別の基材に描かれた肖像画が数点貼り付けられていることが知られ、その下に異なる肖像があるかどうかに関して議論されてきた。2009 年 9 月に始まる展覧会に向けて、現在修復や科学的調査が行われているので仮定的なものではあるが、本祭壇画に関わる新しい世代の肖像が、古い肖像の上に加えられたとみなすことができる。
›メムリンクの《最後の審判》では、別の基材に描かれたトマーソ・ポルティナーリの肖像が、大天使ミカエルの天秤の選ばれた側の魂に貼り付けられている。この添加に関する議論は多く、下に異なる顔があるかどうか不明である。しかしながら、制作の初めからポルティナーリが関与していたとは思われないので、下にあった顔に替えて、ポルティナーリの注文で顔が貼り付けられたとみるのが妥当であろう。いずれにしても《最後の審判》という画題は、そこに描かれた肖像の座主に対する好悪の感情の受け皿となり易かったと思われ、《ボーヌ祭壇画》やコーリン・デ・コーテルの《ザンクト・アルバヌス三連画》のように、この主題の作品に加筆や変更の多いのも事実である。
›既存のイメージに、扉を使って肖像を添加する方法は、最も広い意味で《メロド三連画》から既に始まっていたものであるが、《ジャン・ド・フロワモンの二連画》は、社会的地位の上昇という個人的願望をこめて制作された点で特筆される。
›《最後の晩餐》の主題は、ディルク・バウツの同主題作品において常に言及されるように、一定の集団への帰属やその結束を示すために制作されたと看做される場合が多く、「聖カタリナ伝の画家」による同主題作品への加筆・変更もそのような事情を推察させる。政治・社会的変動期に活躍したこの画家は、同趣向の作品を他にも制作している。
›肖像の加筆を依頼した注文主の文書等の史料から、その存在が知られる作品もある。

■聖職者の加筆肖像のある作品
›現在は切り離されて保管されているロヒール・ファン・デル・ウェイデン工房の《受胎告知三連画》は、肖像の顔を切り取って別のものをはめ込むという珍しい手段で、新しい肖像が加えられている。本来の寄進者はオルベルト・ド・ヴィリャである可能性が高く、その肖像は、破棄されるためというより、大事に保存されるために切り取られたものと思われる。新しい座主はヴィリャ家のためのミサを担当していた聖職者であろう。
›メイヤー・ファン・デン・ベルフ美術館にある《聖誕三連画》には、別の基底材に描かれた顔が貼り付けられているが、同様の処理を示す痕跡が下にあるため、何人かの聖職者が次々に顔を取り替えていったことがわかる。個人の所有物というより、同じ宗教施設内で所有権が譲渡されたものと思われ、最後の所有者は、この場所ではなく扉絵に肖像を描くことで、塗りつぶされてしまうことを回避している。
›ブリュヘ近郊テル・ダイネンに建てられたシトー会修道院の第３０代修道院長だったクリスティアーン・ド・ホントは、様々な作品に肖像を描かせることを好み、「1499 年の画家」と呼ばれる逸名の画家に興味深い二連画を制作させた。その裏面に第３２代修道院長だったロブレヒト・ド・クレルクが肖像画

を加筆させている。このことで彼は、扉に描かれた強力な救世主の画像に祈り続けるイメージを得ることができた。これは、宗教改革の波が押し寄せてきた困難な時代の修道院の存続と継承に対する新しい座主の決意を示すもののように思われる。

■別の基底材に描かれた肖像が添付された例―その理由に関する史料的裏付のないもの
>マレイニッセンによって謎とされたこの方法は、元来修復のために開発されたものと思われるが、修復のためとは考えられない場合にも適用されている。その理由としてあげられるのは、難しい構図において肖像の位置を確定する方便として、あるいは、実物を前に描いた「リアリスムの証だった」ことを示すため、である。

■加筆肖像の逆のパターンとして、肖像が消去された例

>肖像が消去された例は数多く報告されているが、中でも、市場の発展期に活躍したヒエロニムス・ボスの作品に数多くみられる。ボス工房の性格については近年研究が盛んになり、下絵の調査などから有能な弟子の手で、肖像の消去や、それを覆い隠すようなモチーフの加筆が行われたものと、思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）
① Junko Ninagawa, "A Form of Succession," in: *Crossing Cultures. Conflict, migration and Convergence, The Proceeding of the 32nd International Congress in the History of Art, 2008, Melbourne,* 448-452, 2009. 査読有
②Junko Ninagawa, "Stepping in a painting," *Proceedings of the XVII World Congress of Aesthetics, Ankara,Turkey 2007,http://sanart.org.tr/PDFler/77.Pdf* 2008. 査読有
③蜷川順子、ヨーロッパ人と近代―フェルメールのデルフトの眺望を手がかりに、関西大学東西学術研究所紀要、41、3-22、2008 年、査読無
④蜷川順子、《メロド三連画》－その成立事情をめぐって、美術史、162、208-223. 2007 年、査読有
⑤Junko Ninagawa, "The Mirrors by Johannes Vermeer," *Essays and Studies by Members of the Faculty of Letters, Kansai University,* 29-44, 2007, 査読無
⑥蜷川順子、ベルギーにおける芸術作品の保存・修復の思想と歴史―１９５０年の《ヘントの祭壇画》修復の周辺とその後、平成 15~18 年度科研費補助金（基盤研究（B）(2)）研究成果報告書[代表：岡田温司]、161-182、2007 年、査読無
⑦蜷川順子、樋上将之、《ヘントの祭壇画》修復の歴史、平成 15~18 年度科研費補助金（基盤研究（B）(2)）研究成果報告書[代表：岡田温司]、183-212、2007 年、査読無

〔学会発表〕（計 6 件）
①蜷川順子、ヨーロッパ人が描く環インド洋世界の景観、関西大学東西学術研究所　環インド洋文化研究班研究例会、2008 年 3 月 21 日　関西大学
②蜷川順子、ヨーロッパ人と近代―フェルメールの《デルフトの眺望》を手がかりに、関西大学東西学術研究所シンポジウム　近代との出会い―風景からのアプローチ―2008 年１月 24 日　関西大学
③Junko Ninagawa, "A Form of Succession: On the Triptych of the Baptism of Christ by Gerard David," the XXXIIth Congress of the International Committee of the History of Art, 15 January, 2008, the University of Melbourne (Australia).
④蜷川順子、継承の形（続）―ヘラルト・ダフィットの＜キリストの洗礼三連画＞をめぐって、ネーデルラント美術学会、2007 年 11 月 23 日、関西大学
⑤ Junko Ninagawa, "Stepping in a Painting," the XVIIth International Congress of Aesthtics, 13 July, 2007, Middle East Technical University (Ankara, Turkey).
⑥蜷川順子、継承の形―ヘラルト・ダフィットの＜キリストの洗礼三連画＞をめぐって、美術学会史学会西支部例会、2007 年 1 月 27 日、福岡アジア美術館

〔図書〕（計 2 件）
①翻訳、アロイス・リーグル著、中央公論美術出版、ローマにおけるバロック芸術の成立、2009 年、331 ページ
②共訳、エドガー・ヴィント著、晶文社、シンボルの修辞学、2007 年、487 ページ（188~240 ページ担当）

６．研究組織
(1)研究代表者
蜷川　順子(NINAGAWA JUNKO)
関西大学・文学部・教授
研究者番号：００２６８４６８